

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 福島 敦樹

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院

病院長 横山 彰仁

退任にあたって

医学部長 杉浦 哲朗



平成11年4月に高知医科大学に赴任して以来、早いもので17年が過ぎました。平成22年4月より病院長を務めさせていただき、また平成26年4月には医学部長に就任し、特にこの6年間はあっという間に経過した気がいたします。皆さまには公私にわたり大変ご支援をいただき、心から感謝いたします。

2004年度に新医師臨床研修制度が創設されましたが、その結果、臨床研修医が大学病院以外の病院を選ぶケースが多くなりました。医師が不足した大学病院では、地域の医療機関への医師の派遣に困難を生じるようになり、医師の地域・診療科偏在が顕在化しています。このような医療事情を背景に、高知大学医学部が地域に必要とされ信頼される存在であるためには、基本理念として掲げる「地域に密着した先端医療の推進」と「人間性豊かな医療人の育成」に基づいて、医学教育課程の改革と魅力ある卒後臨床研修体制の整備を進めなければなりません。すなわち、地域医療に貢献する強い意志を持った優秀な若手医師を育て、地域に恒常的に送り出すことです。このために、医学部6年間の教育において医師として必要な幅広い資質を涵養することが重要で、将来、患者を全人的に診ることができるような基礎を構築するとともに、学生のうちから医師としての社会的規範、行動規範の形成が求められます。学生は教科書的な医学知識のみでなく、医師としての思考法、診療技能そして患者の社会的・心理的背景に注意を払うなど、「病気だけでなく病者を診られる医師」になるために必要な態度・習慣を身につけ、医療の社会的役割を理解することが求められます。

2014年には共用試験CBTの合格基準を全国の大学で統一し、一定の学力を有する学生にStudent Doctorの称号を授与して卒前臨床実習に進む仕組みが確立され、医学生が臨床実習で実施できる医行為の水準も策定されました。また、日本医学教育評価機構(JACME)が2015年12月に発足し、国際基準を踏まえた医学教育認証評価制度の下、診療参加型臨床実習がさらに充実し、加えて、国家試験の見直しも予定されています。このように、卒前医学教育が大きく改善し、診療参加型臨床実習が充実すれば、現在の初期臨床制度の達成目標が卒前教育で達成できることとなります。また、卒後医学教育では新しい専門医制度が導入されることで、シームレスな医学生涯教育が確立され、国民の求める優れた医師の育成につながるものと期待されます。

このたび任を終えるにあたりまして、高知大学医学部附属病院の教職員の皆さまには、より一層協働し高知県の医療の発展に寄与していかれることを願っております。

退任にあたって

高知大学医学部泌尿器科学講座 教授 執印 太郎



この度、3月で定年退任となります。長い間、医学部や附属病院の皆様には大変お世話になりました。昔のことしか覚えておりませんが、思いつくことを書いてみました。1995年に奉職した時は、日本もバブル直後で国にも体力が残っていました。医学部もできて15年程度であり、皆若く、私の頭の中にある医学部や医学部附属病院とは少

しかけ離れた存在であったように記憶しています。当時、病院運営委員会で外来患者をもっと多く診た方がよいと発言したところ、患者さんは関連施設から紹介して手術をし、元の施設に返せばよいので外来患者は増やさなくてもよいとのことでした。医局内のスタッフも1-2名を除けば皆若く、当時45歳の私はこれで教室が維持できるか心配していました。泌尿器科の手術を若いスタッフに教え、なるべく多くの医局員に基礎・臨床研究をすることを教えました。その後、上から順番に海外留学(主にアメリカ)に行き、海外の研究や医療を体験してもらいました。全部で10名以上、海外留学したと思います。その間、泌尿器科学教室の関連施設を増やすための努力をしました。その時期は現在のように診療もそれほど忙しくない時期であったのでこれらのことが可能であったと思います。運がよかったのかもしれませんが。

その後は、のんびりした時代も終わり、国の大学に対する雰囲気厳しくなってきました。まず、2001年の文科大臣の大学合併発言で全国の大学合併が始まり、2003年に高知大学と高知医科大学が合併しました。当時はこの合併で地方大学はこのまま存続可能と考えていました。同時期に医療に対する世の中の風当たりが厳しくなり、医療事故についての対応も複雑化して、主張の強い、所謂、モンスターペイシェントなどが現れ、暴力的な発言を受け苦労したことも覚えています。新臨床研修制度も、この時期に施行され初期研修医が地方大学から姿を消して苦労したことを覚えています。それは現在も同様の傾向があります。

2010年頃からは大学病院の再開発に関して病院の収支を厳しくチェックされる時代となり、同時に運営交付金の削減に伴う人員削減が求められる時代となりました。数年前に国立大学は研究中心大学、Super global型大学、地域貢献型大学に分けられ、高知大学は地域貢献大学になりました。そのため、「地域貢献」を主軸に大学を運営しなければなりません。幸いにして、泌尿器科は早い時期にロボット支援手術のダヴィンチを購入していただき、この点で比較的水準の高い医療を地域にお届けしているという自負があります。このところ附属病院全体もスタッフが成長して力をつけたと感じております。医学部や附属病院のスタッフの方にはこれからは「地域貢献」としてさらに質の高い医療や臨床・基礎研究を行うように要求されると思います。皆様方の力でこの多難な時代を力を合わせて乗り切っていただきたいと思っています。私はしばらく大学に残りますので、大学のために少しでも貢献できればと思っています。今後ともよろしくお願いたします。

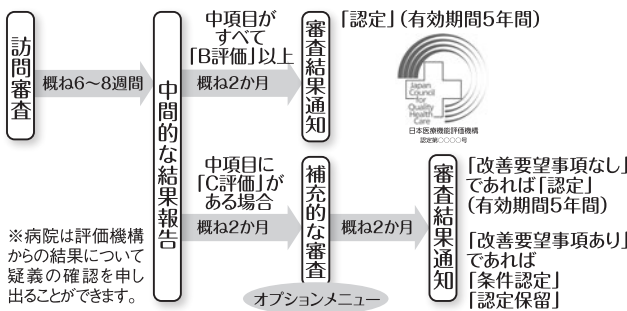
病院機能評価更新審査を受審して

病院機能評価受審のための院内ワーキング座長 寺田 典生／楠瀬 伴子

昨年12月16日・17日の2日間にわたる「病院機能評価更新審査」の受審が無事終了しました。病院職員が一致団結し準備、対応して下さったことにお礼を申し上げます。

そして2月10日、待ちに待った「中間的な結果報告」が届きました。報告書で評価「C」の項目がありませんでしたので、特段の理由がない限り「認定」となる評価結果と言えます。ホッと一息つけたように感じます。これから機構では評価部会に進み、評価委員会・運営会議を経て、評価結果が確定し郵送で結果の通知が届きます。ここで正式にめでたく「認定」となり、概ね3週間後に認定証が送られてきますので、今はこの認定証を心待ちにしたいと思います。(図1)

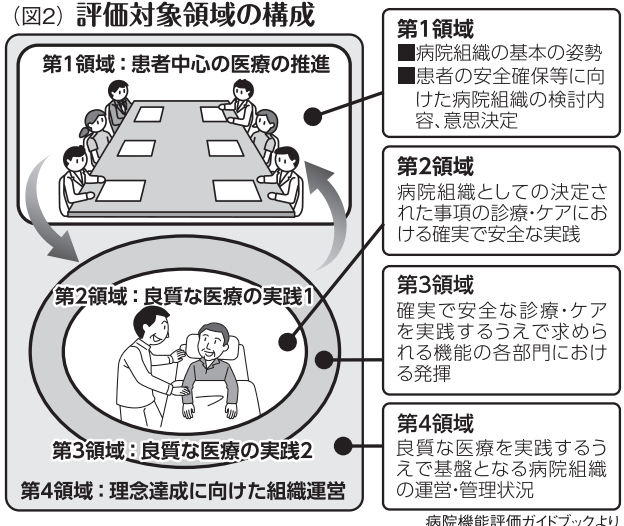
(図1) 訪問審査から審査結果の通知まで 病院機能評価ガイドブックより



今回の受審に至るまでのことを振り返ってみますと、2年前の平成25年にこの更新審査受審のためのワーキンググループが設置されました。前回の更新認定を受けてからの有効期間は平成27年3月27日であったため、平成26年度に更新審査を受けるかどうかの検討から始まりました。病院の主要施設(手術室やICU等)が受審後すぐに移転になるのは望ましくないとの病院評価機構の見解、特例措置として1年間の延長が可能であること、施設基準および特定機能病院の要件として、第三者評価を受けていることが望ましいとなっていることから1年間の延長を申請し、平成27年度に受審することが決まりました。

病院機能評価は、病院が組織的に医療を提供するための基本的な活動(機能)が、適切に実施されているかどうかを評価する仕組みです。(図2)

(図2) 評価対象領域の構成



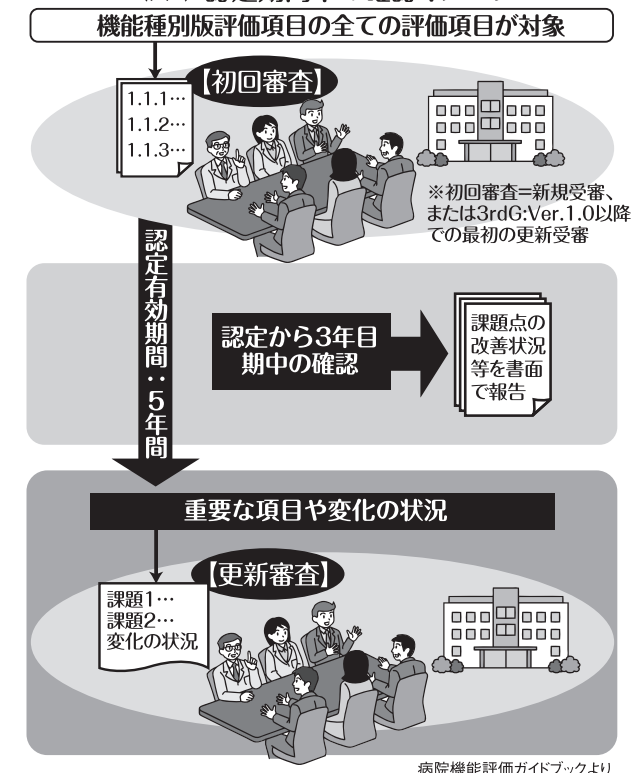
ワーキンググループのメンバーは地道に準備を進めていましたが、結局のところ直前にラストスパートで整えることになったものが少なくありません。各種規則やマニュアル等の見直しと修正、ケアプロセスの準備など追い立てられるように準備しました。

受審当日は、7名のサーベイヤーが来院されました。病院長による病院概要説明から始まり、書類審査、面接調査、各部署訪問、ケアプロセス調査と予定に従って進みました。様々な場面で対応して下さったスタッフの皆さんは、質問に素早く適切に回答しようと一生懸命に数人体制で対応して下さり、ケアプロセス調査の場面のみならず、全てに“チーム”としての一体感を感じました。講評では、おおむね良い評価をいただけたと思いますが、今後の取り組みに期待するとのコメントも多々ありました。今後は、組織的に医療を提供するための基本的な活動(機能)に継続的に取り組んでいくことが必要です。様々な取り組みについては、速やかに丁寧、検討を十分に行い対応していくようにいわれました。

今回認定された場合の有効期間は5年間であり、今までと変わりませんが今回から「期中の確認」(図3)が加わります。質改善を目的に行われるもので、書面による確認(自己評価)が3年目に実施されます。継続した取り組み、努力が評価されることとなります。

「中間的な結果報告」では、B評価が22項目ありました。特にこの22項目への取り組みが問われます。すでに、組織的に取り組んで行く体制を検討しています。今回の受審をきっかけに取り組む課題が明確になりました。今後も、一致団結して取り組んでいきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。「継続は力なり」です。

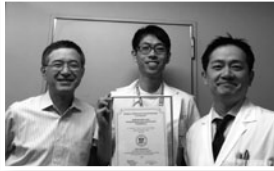
(図3) 認定期間中の確認イメージ



平成27年度 下半期の表彰や、 感謝状の報告

今年度の下半期に高知大学医学部附属病院において表彰された職員・学生についてご紹介いたします。この他にも、医学部附属病院では、表彰・感謝状の授与等について、随時ホームページへの掲載を行っています。

American Association for Bronchology and Interventional Pulmonologyにて、 Editorial Excellence Awardを受賞



平成27年10月15日、高知大学医学部外科学(外科2)講座(渡橋和政教授)の廣橋健太郎助教・穴山貴嗣講師とカナダトロント大学との共同研究の成果が、American Association for Bronchology and Interventional Pulmonology においてEditorial Excellence Awardを受賞しました。

この研究では、組織血流評価や肝機能評価に広く臨床使用されているインドシアニングリーン(Indocyanine Green: ICG)の吸光機能に着目し、低出力の近赤外線レーザー光を組み合わせることで、肺癌を選択的に光温熱効果によって死滅させる条件を動物実験によって明らかにしました。将来的に、髪の毛ほどの細い光ファイバーによって肺の末梢までレーザー光を伝達しICG注入部位の癌を局所治療する治療の開発を目指します。表彰式はカナダモントリオールにおいて10月24日に行われました。

第43回 日本関節病学会 学会集会奨励賞を受賞

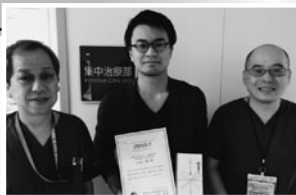
平成27年11月5日～6日に開催された第43回日本関節病学会で、整形外科の阿漕孝治医師が学会集会奨励賞を受賞しました。

今回、受賞した演題「ラット変形性膝関節症モデルにおける軟骨下骨支配神経の疼痛関連分子変化と組織変化との関係」の研究内容は以下の通りです。

変形性膝関節症は多くの患者がいるにもかかわらず、痛みの発生機序は不明確な部分が多いのが現状です。我々は変形性膝関節症の痛みにおける軟骨下骨の関与に注目しました。ラット変形性膝関節症モデルを用いて、軟骨下骨を支配する神経の疼痛関連分子(CGRP、神経成長因子受容体(TrkA))は、軟骨下骨の組織学的変化と高い相関をもって増加することを明らかにしました。このことから、変形性膝関節症変化が進行するほど、軟骨下骨が痛みの治療ターゲットとして重要になってくると考えられます。



第22回 日本静脈麻酔学会 JSIVA賞を受賞



医学科「先端医療学コース」履修生 小山 毅さん(4年生、学際的痛み治療研究班所属)が、平成27年11月14日に開催された第22回日本静脈麻酔学会において行った発表、「全身炎症関連認知機能障害に対するデクスメトミジンの効果」が最優秀演題賞に当たる「JSIVA賞」に選ばれ表彰されました。

小山さんは、麻酔科学・集中治療医学講座 横山 正尚教授の指導のもと研究をおこなっており、受賞した発表では、最近問題となっている全身炎症後の認知機能障害の病態機序に神経炎症が重要な役割を果たすこと、その過程を $\alpha 2$ アドレナリン受容体作動性鎮静薬であるデクスメトミジンが抑制する可能性を報告しました。

第52回 日本口腔組織培養学会 ベストプレゼンテーション賞を受賞

平成27年11月21日に開催された、第52回日本口腔組織培養学会で、歯科口腔外科の仙頭慎哉医師がベストプレゼンテーション賞を受賞しました。

今回、受賞した演題「口腔扁平上皮癌におけるエクソソームを標的とした治療に関する基礎的研究」の内容は以下の通りです。

口腔扁平上皮癌細胞から分泌される膜小胞であるエクソソームは、癌細胞自身に取り込まれ、自身の発育・進展を促進することが明らかになっており、そのエクソソームを標的とした治療を開発することで癌の発育・進展を抑制できる可能性があります。今回、ヘパリンがエクソソームの癌細胞への取り込みを抑制することを明らかにし、癌細胞にヘパリンを持続的に作用させることが癌の発育の抑制に繋がる可能性があり、エクソソームが癌治療の標的となりうることを見出しました。



治験貢献賞表彰

高知大学医学部附属病院では、治験に貢献された医師に病院長より表彰状を贈呈しています。承認前の医薬品の安全性、有効性を確認する治験に貢献された医師を表彰することで、治験に対する理解とモチベーションを高めることを目的としています。

本年は、平成27年11月17日に治験貢献賞授与式を開催し、平成26年度に当院で行われた治験においてご活躍された、右記の先生方を表彰しました。

◆治験貢献賞(敬称略)

- 1位 耳鼻咽喉科 教授 兵頭 政光
- 2位 精神科 講師 上村 直人
- 3位 皮膚科 講師 中島 英貴

◆治験実施優秀チーム賞(敬称略)

- 1位 皮膚科 講師 中島 英貴



永年勤続表彰

永年勤続の表彰式が平成27年11月25日に朝倉キャンパスで行われました。
岡豊キャンパスからは次の9名の方が表彰されました。

(敬称略)

◆ 看護部	青野 愛里
◆ 看護部	池上 直子
◆ 看護部	石井 初恵
◆ 看護部	小松 恵
◆ 看護部	中屋 忍
◆ 看護部	濱田 真理子
◆ 看護部	山崎 裕美
◆ 総合研究センター	都留 忍
◆ 学生課	仙波 裕紀子



20年間お疲れさまでした。今後ともよろしく願います。

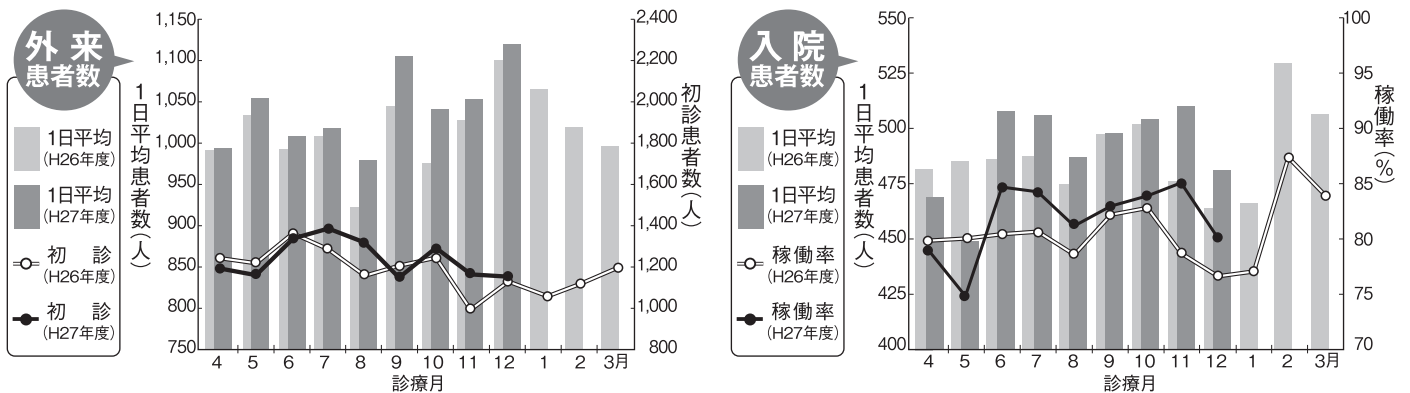
医学教育等関係業務功労者表彰



文部科学大臣は毎年、医学又は歯学に関する教育・研究、もしくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功労のあった方を表彰しています。

平成27年度も、この表彰式が12月2日に東京で行われ、本院の受賞者である栄養管理部 岡村 栄作調理師と、放射線部 横田 典和主任診療放射線技師の両名に、表彰状及び副賞が贈呈されました。

診療状況



編集後記

今年もすでに1ヶ月以上が過ぎました。緩やかではありますが、春が近づいてきているような穏やかな日が続いており、やはり南国土佐と感じさせられます。今回の病院ニュースでは、これまで教育・研究・診療に多大な貢献を頂き、今年度でご退任される杉浦哲朗先生(医学部長・検査部部長)、執印太郎先生(副病院長・泌尿器科科長)から退任のご挨拶をいただきました。

また2面には、昨年の病院機能評価受審という一大イベントを受けて、院内ワーキンググループ座長の寺田典生教授と楠瀬伴子看護部長に「病院機能評価を受審して」と題して寄稿していただきました。また、3面以降には、治験貢献者表彰や医学教育等関係業務功労者表彰など、平成27年度下半期の受賞報告特集などを掲載しました。受賞された皆様には、お祝いと感謝を申し上げます。(文責：依岡 千恵子)